

1	—— かなしみの水たまり……………	5
2	—— 追われるすみか……………	15
3	—— ゲンゴロウのくらし……………	27
4	—— ハンドブックをつくろう！……………	35
5	—— 消えたシンボル……………	47
6	—— お化けガエルあらわる……………	61
7	—— 広がる暗い雲……………	71
8	—— けわしい道のり……………	81
9	—— 田んぼの健康診断……………	89
10	—— おどろきの底から……………	99
11	—— カエル沼の新人……………	111
12	—— ばくらは「田んぼ応援団」……………	119

究者を訪ね、オオイチモンジシマゲンゴロウは木々に囲まれて暗い感じの池や沼にすることを学んできた。そして、福島県内ならこのあたりだろうと目星をつけて探した結果、この沼で見つけることができた。

そんな思い入れの強いゲンゴロウだ。

——この沼だけでなく、すぐに干上がりそうなどころにもいたのに。

福島県で初となるオオイチモンジシマゲンゴロウが見つかったときのことを思い出すと、やりきれない気持ちになる。

その思い出のゲンゴロウ、しかも福



オオイチモンジシマゲンゴロウ。全国的に記録が少なく、絶滅も心配されている

島県では貴重な種とされるゲンゴロウが姿を消した。網を何度か出し入れしたが、その日はついに、見つけることができなかった。

たった一度の調査で、いないと結論づけることはできない。あきらめたくもない。だが、この沼にはもうすめないのだろうというのが三田村さんたちの見方だった。

貴重種といわれる昆虫が、一気に姿を消すことがある。

その大きな理由として指摘されるのが、生息地の環境破壊だ。

工場や家、店を建てるために大がかりな工事をする。それによって、えさになる植物が消えたり、温度や湿度、日の当たり具合が変わったりすると、それまでいた昆虫は生活しにくくなる。そういう例を三田村さんも、何度か見聞きしてきた。

でも、今回はちがう。工事によって沼のようすが変わったわけではないからだ。三田村さんはあらためて、沼のまわりの風景を見た。

ほんの数カ月前まではヨシが生いしげり、その周辺にはハンノキが生えていた。沼につながる湿地にも、何種類もの木があった。

調査に必要な道具

採集ケース

つかまえた生きものを持ち帰るときに使う。1回の調査で20個ほど用意する

許可証

立ち入りや捕獲が禁止されているエリアでは、事前に許可を取る



胴長(ウェーダー)

水中に入ってもぬれないよう、胸当て・ズボン・くつが一体となったゴム製の衣服

網

網目のこまかいものを使う

海道での採集もそのひとつだった。

平澤さんはこの日の採集に、特別な思いを抱いていた。

ねらうのは、アナバネコツブゲンゴロウという体長5ミリメートルほどの小さな種だ。草が生い茂る湿地帯や沼に生息する。「アナバネ」の名前の通り、はねに針でついたようなあばた状の点々があることで、コツブゲンゴロウというよく似た種と見分けられる。

国内では、オホーツク沿岸部にしか生息していないといわれる。平澤さんは何度か探しに来ているが、見つけられずにいた。

近年は、野外でクマと出会う機会が増えている。北海道にはヒグマがいて、ばったり出くわした人を傷つける事件も多数起きていた。

——ゲンゴロウは見つけないけど、ヒグマに出会ったら、一巻の終わりだな。

緊張しながらの観察・採集になるが、ゲンゴロウの魅力には勝てない。ゲンゴロウのハンドブックをつくるからには、よく似たものと比べられるようにしたい。たまにしか見つからない種も、なんとかして載せたかった。